

第3 問題作成部会の見解

1 出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

- 言語を手掛かりとしながら、文章から得られた情報を多面的・多角的な視点から解釈したり、目的や場面等に応じて文章を書いたりする力などを求める。近代以降の文章（論理的な文章、文学的な文章、実用的な文章）、古典（古文、漢文）といった題材を対象とし、言語活動の過程を重視する。問題の作成に当たっては、大問ごとに一つの題材で問題を作成するだけでなく、異なる種類や分野の文章などを組み合わせた、複数の題材による問題を含めて検討する。

2 各問題の出題意図と解答結果

第1問 「食べること」に関する二つの文章を並置し、それぞれの論旨を読み取る問いに加え、両者の共通性と差違を踏まえて、二文を関連づけた思考を問うた。【文章Ⅰ】は、檜垣立哉『食べることの哲学』（世界思想社 2018年4月）より一部抜粋（約2100字）で、【文章Ⅱ】は、藤原辰史『食べるとはどういうことか』（農山漁村文化協会 2019年）より一部抜粋（約1300字）である。前者は倫理的なアプローチ、後者は環境論的アプローチという違いがあるが、擬人化した動物の思考を参照したり、人間を生命全体の一部と捉えたりすることによって、人間を中心としない観点より考察している点で共通している。

問1では字義を問う(ii)が新傾向だが、従来の漢字問題と同様に正解率は高かった。問2は筆者の考える「よだかの思考の変化」を問う問題。問3はよだかに仮託された著者の生命観を問うた。問2と問3が重なり合う部分があるとの指摘もあったが、複数の文章を素材とした出題を行うときに傍線部間の干渉をどう回避するかは今後も検討を要する。ただし、今回は問2で宮沢賢治の引用文二カ所に関わる思考の展開、問3でよだかに仮託された著者の生命観を問うたため、選択肢は似ているものの全く異なる文章表現から読み取る力を測っている。問4は比喩的に説明されている文章の読解問題。問5は表現の特徴を問う問題。大問1の中でもっとも解答が分かれた。問6は生徒のメモによって二つの文章の共通点・相違点・およびそこから考えることを整理する問題。(i)では【文章Ⅰ】の特徴（相違点）を、(ii)では両者を重ねて読んだときに得られる考えを問うた。後者の解答はややばらけたが、段階的な問いとして適切な問題であった。メモの分量も受験者の負担を考慮すると適切であった。大問全体では、おおむね成績層に応じた解答率分布となっており、複数素材問題として適切に評論読解の力を測ることができたと考えている。

第2問 黒井千次「庭の男」（『群像』1991年1月）は、子どもたちが独立し、妻と二人でセミリタイア生活を送る「私」の日常を描いた短編小説である。出題箇所は、定年後の初老の男性「私」が、隣家の少年との間で生ずるトラブルに遭遇するという内容であり、少年の心情を斟酌しつつ、相手に対する批判と自らの内奥に萌す共感との間で逡巡する主人公の屈折した心理を密度の高い叙述から読み取ることを求める出題とした。各設問の正答率は、概ね成績層に対応したのものとなっており、受験者の基礎的な読解力を適切に測ることのできる問題であった。

問1は、隣家の少年に対する「私」の行動について、その背景や動機を文脈に基づいて読み取る力を問う問題である。完答率はやや低かったが冒頭場面の読みを問うには適切であった。問2は、少年の言動に「私」が受けた衝撃を、比喩で示される「私」の感覚について読み取る力を問う問題である。問3は、「私」の少年に対する心情の変化について、その状況を読み取る力を問う問題であった。正答率は高かった。問4は、(i)隣家の少年への呼称の変化から「私」

の心情を読み取る力を問う問題と、(ii)看板の絵に対する呼称の変化から「私」の様子や心情を読み取る力を問う問題からなる。問5(i)は「案山子」と「雀」を用いた比喻表現を考えるために国語辞典と歳時記を調べた結果をまとめ、理解を深める状況を設定し、複数の情報を目的に応じて適切に結びつける力を問う問題であるが、正答率がやや高く取り組みやすい問題であった。同(ii)は調べた内容から導かれる考察と本文の修辭的表現をふまえて、登場人物の状況や心情の読解力を問う問題である。正答率は、概ね想定範囲内におさまった。

第3問 問題文は、中世に成立した『増鏡』【文章Ⅰ】と『とはずがたり』【文章Ⅱ】より、後深草院が異母妹である前斎宮に懸想し、これを院に親しく仕える女房に取り次ぎさせる、同一場面をとった。場面自体の理解には難しさがあるが、設問全体として見れば、文章全体の量、単語・文法ともに標準的で、相互の文章を参照できることも読解の助けとなるため、受験者の基本的な学力を問うことができる文章であった。設問文が従来よりも長くなったことには、選択肢等で一定の配慮を加えた。問1は語句解釈の問題で、単語の意味と語法が正しく理解できているかを問うた。現代語にも文語的に残る語彙についての理解が特に低かった。問2は、文法・単語に関する知識を、文脈理解のために活用できているかを問う問題とした。問3は発言主を院と特定してその言動について前後の文脈理解を問う問題だったが、傍線部の情報のみに引きずられた誤答が際立った。問4では、同一場面を描いた二つの文章の読み比べを言語活動の実際の場面に置いて、誘導的に考えさせる問題を設定した。(i)で臨場感に関わる全体的印象に関わる部分、(ii)で二条のコメントを具体的に検討する部分の双方により、文章Ⅱの読解を確認した。その上で、(iii)は文学史を見据えつつ、書き手の視点によって生まれる差違を、二つの文章に基づいて問う問題とした。会話文そのものに設問指示や補助的情報を含み込む点で、高次の読解力が要求される場所であったが、難易度として適正であった。

第4問 学者として著名な阮元の詩とその序文を題材とした。問題文は、美しい庭園で起きた不思議な蝶をめぐる出来事を回想した情緒に富む内容である。また、「胡蝶の夢」を思わせるできごとをめぐり、背景には董其昌や王徽之、詩扇や画など文人の文化が描かれている。それはまた日本の古典文化に大きな影響を与えたものであり、中国文化への理解を深める点でも素材として適当であると考え。そして試験問題として解答に取り組むのみならず、作品に表された幻想的なはかなさをも味読されることを期待した。

各設問では以下の点を問うた。問1では漢字の字義を正確に考えられているかどうか、問2、問3では返り点・書き下し文や文の解釈、問4は韻字と詩形に関する理解など、「国語総合」で学習した内容を十分に理解しているかどうかを問題とした。これらの設問での理解を踏まえた上で、問6では【詩】と【序文】の双方を正確に読み解き、不思議な蝶をめぐる出来事を正しく把握できているかどうかを問い、問7では【詩】と【序文】から作者の心情を読み取れているかどうかを問うた。

各設問の正答率は標準的な数値で、識別力も高く、共通テストとしてふさわしい問題であったと考える。

3 出題に対する反響・意見等についての見解

第1問 問題文の論理展開および言葉の定義を問う問題を配置したが、設問のあり方や配点のバランスは適切であり、問題文の内容も受験者にとって身近な題材であったと評価された。素材の選択は論理的思考力や文章読解力を確認する上でも適切であり、おおむね学習指導要領や日頃の学習活動の実態をふまえた設問がなされたとの評価もあった。2つの文章を対比させて読解する新傾向の出題によって、単純なコンテンツの読み込みを求める出題形式からの転換が明

確になった。問5については、やや解きにくいという指摘のほか、言語表現に関する問題の要否についても意見があったが、内容・レベル的には十分対応可能であると判断された。問6は、昨年度に引き続き、学習後に【メモ】を作成したという設定。受験者の日頃の学習活動をふまえたもので、まぎれなく解けるが、今後もこの傾向が続くのであればさらなる工夫が必要との意見もあった。

第2問 人物の内面が丁寧に描写され、心情の変化の把握を中心とした文学的な文章を的確に読み取る力を問う問題として適切であるとの評価を受けた。従来、問1に配置されていた語彙問題に代えて、各設問のなかで、語句の意味や、語句の意味と関連づけることで果たされる解釈を確認する問いを設定したことについては、一定の理解が得られた。語彙力の問い方に関しては、引き続き適切に検討していきたい。また、問5について、本文の表現に注目し国語辞典や歳時記で調べたことを【ノート】にまとめ、素材文の内容理解を深める学習場面を設定したことについては、問題作成方針に合致しているとの評価を受けた。他方、本文以外の様々な要素に思考を向けねばならないことに伴う受験者の負担への懸念も示された。今後は、文章量、難易度、【ノート】の示し方や素材文との関係性にとくに配慮しつつ、さらなる工夫と改善を遂げる余地があろう。

第3問 古文を的確に読み取る力、その内容の豊かさを理解する力を確認する上で適切な素材文であり、文章量、難易度とも適切であったとの評価をいただいた。問2、問3は文法を解釈に応用させる点、文脈を押さえた上で心情を的確に読み取る点を評価された。新傾向の問4は、対話的に学習を深める設定や授業中の生徒が学習する場面の設定に関して、問題作成方針に合致していると評価された。(i)で表現の特色、(ii)で作者の内面などを読み取らせ、(iii)は作品の価値を考察する力を問う構成も適切であると評価された。(iii)は「国語総合」の範囲を超えるとの懸念も示されたが、対話文と二つの文章の比較のみから正答を導くことは可能であり、文学史の知識は必須ではない。今後も受験者の学習の成果が的確に測れるような素材の選定と出題を心がけたい。

第4問 問題文の選択および分量、設問のあり方および難易度にわたり、概して肯定的な評価を受けた。詩と序文からなる出題についても、「内容を読み比べ、必要な情報を精査・解釈する力が問われており、問題作成方針に合致している」との評価があった。設問に関しても「基本的な知識に関する設問や形式の異なる文章から内容や心情を考える設問があり、漢文の学習成果を見る難易度としては適切であった」と評された。一方、問2については白文に上下点まで施すことを求めている点で難易度が高いという意見もあったが、書き下し文を添えることにより文脈に沿った理解を期待する設問であり、正答率も低くはなかった。今後も適切な素材を採用し、設問の難易度や配点などに配慮したバランスのよい出題を心がけていきたい。

4 ま と め

第1問 本試験では、単一の文章を正確に読解する力を基本としながら、その上で複数の文章を比較・検討する力を問う構成を意図した。内容・難易度としては概ね適切であったと評価を受けた。また素材文の論理性に関しては、文章そのものの難易度とあわせて適切に選定するよう、今後も留意したい。学習者による「主体的・対話的で深い学び」を踏まえた設問は、単独で切り離して考えさせるのではなく、素材文の内容と本質的に関連付けられた問いとなるように今後も留意する必要がある。

第2問 基本的な読解力を判定する上で適切な出題であったといえる。他方、短い時間で、種類の異なる文を読ませ、解答に比較的時間のかかる設問を配置した構成について、文学的文章

をじっくり読む態勢が取りにくくなることを懸念する声もあった。学習場面を設定した設問については、実際の学校現場における探究活動にも接続し得るものとして高い評価を得た。受験生にとっての「わかりやすさ」と、出題側が求める能力と問い方とのバランスについては、今後も難度に配慮しつつ、さらなる改善につとめたい。

第3問 文法・敬語・単語などの知識を活用しつつ、文脈を踏まえて考えさせる設問や、複数資料を提示した上でそれを比較しながら本文全体の違いを考えさせる設問などは、古文の学習成果を見るための出題として適切なものであった。文章量や難易度については懸念も寄せられており、今後の作題にあたっては引き続き留意したい。テーマの選定や内容や問い方についても、引き続き工夫を重ねてゆくことが求められる。

第4問 出題にあたっては、問題文の分量と注および設問の割合を調整することで、受験者が取り組みやすくなるように努めた。今後も問題文を吟味し、設問の難易度や知識を問う問題と解釈や思考力・判断力・表現力等を問う問題の配分に留意した上で、「国語総合」で学習する内容と思考力・判断力・表現力等をバランスよく問う出題を検討してゆくことが求められる。